



開会挨拶（木村会長）

爽やかな秋空の広がる中、第二十七回岡山県現代俳句大会が三十一名の出席の中、開催された。

一年間、コロナの感染状況は一進一退の中での開催のため、今回も午後からの開催となったが、会員一同元気な笑顔が印象的であった。

なお、大会投句についてはコロナ禍にもかかわらず投句者六十三名、投句数三百六句の応募。投句者は昨年より二割ほど多くの参加があり、会員の皆様からの投句へのお誘いを頂くなどご尽力の賜物であると

## おokayama県民文化祭参加 第二十七回岡山県現代俳句協会俳句大会

とき 令和四年十月二十三日（日）  
ところ 岡山県ゆうあいセンター



第 53 号

令和 5 年 3 月 発行

もに、俳句への感心の高さが覗えた。

定刻十三時よりの前田宏事務局長の総合司会で開会。「本日の秋天のように晴れやかに自由闊達な意見を盛り上げてください」という木村ゆきこ会長の挨拶からはじまった。

大会選句経過ののち、黒瀬琢葉監査、岸本順子幹事の入選句の披露。顧問、会長、副会長からの講評ののち「おokayama県民文化祭賞」「岡山県知事賞」「岡山県教育委員会教育長賞」「岡山県俳句大会賞」「中国地区各県会長賞」等の受賞作品について日頃の俳句に対する思いや様々な切り込んだ意見交換が行われた。

表彰式は木村会長から、賞状と賞品が授与され、句友からの拍手が送られた。

恒例となっていた「当日句会」もコロナ感染防止の観点から今回も見送られることとなった。

おokayama県民文化祭参加事業として開催された現代俳句大会は秋岡副会長の挨拶により全日程を終了。大会の運営におきましてはマスクの着用、体温チェック、消毒液の設置を行うなどの対策を行い、終了後の感染報告もなく無事終了することができた。

（前田 宏）

# 第二十七回岡山県現代俳句大会受賞作品

## 【おかやま県民文化祭賞】

浮かび出るビルマとふ文字墓洗ふ

畦田 恵子

## 【中国地区現代俳句協会会長賞】

島根県現代俳句協会会長 月森遊子賞

## 【岡山県知事賞】

シヤワー全開私がわたしに戻るまで

佐藤 千恵

日本史に八月といふ悪夢の日

洪谷 達磨

## 【岡山県議会議長賞】

青瓢マスク外せばこんな貌

土屋 鋭喜

鳥取県現代俳句協会会長 植垣規雄賞

繩梯子たれてきそうな盆の月

木村ゆきこ

山口県現代俳句協会会長 久行保徳賞

夏草の中に罌審声上げて

橋本 幹夫

## 【岡山県教育委員会教育長賞】

國境の多き地球や秋の海

國富 柿方

広島県現代俳句協会会長 川崎益太郎賞

青瓢マスク外せばこんな貌

土屋 鋭喜

さようならのらが揺れている夕花野

古川 麦子

岡山県現代俳句協会会長 木村ゆきこ賞

夏草の中に罌審声上げて

橋本 幹夫

國境の多き地球や秋の海

國富 柿方

八月の空が破れてゐたといふ

小西 瞬夏

## 【奨励賞】

口紅をさす少年の夏祭

保田 紺屋

祖母と母とぼく八月十五日

難波 正夫

ハローワーク出れば日暮れて啄木忌

三村 榮一

この暑さダリの時計の左巻き

國富 節子

草笛を君は今なほ吹けますか

柏瀬眞理子

12点 黒瀬 琢葉

9点 鈴木 文子

8点 佐野 由魚

## 作品鑑賞

佐野 由魚

ぶんぶんとりゆうりゆうと舞ふ威鳥 土屋 鋭喜  
オノマトペが見事に成功している。ほとんど宮沢賢治の域に達している。秋の収穫時期に、豊作を予感させる稲田の上を力強く渡る風。風を受けて踊るように上下する風のような威鳥。プラスチックとビニールでできた鳥が怖い。

三叉路に来て羅を見失ふ 小西 瞬夏  
薄着でさつそうと歩く、かっこいい女性を目の隅で追いながら三叉路にさしかかったところで、突然見失ってしまったのでしょうか。艶っぽくて、ドラマを見ているような物語性を感じられます。

踊子の赤のベディキュア下駄の音 青井 通子  
盆踊りの踊子でしょうか、足の爪に赤いベディキュアをつけて下駄をはいているのでしょうか。高校生くらいかな？よくがんばりました。

校庭にみんな仰向け秋の星 畦田 恵子  
秋の星座の観察はとても楽しい。仰向けに寝そべると目の前が一面の星で、地上のすべてを忘れる事が出来る。夜の校庭で仰向けに寝そべるのは、とても貴重な体験です。

第二十三回吟行会

吉備津彦神社吟行記

万波 照世

とき 令和四年十一月十三日(日)  
ところ 吉備津彦神社周辺

吉備津彦神社は古代吉備文化の中心地である吉備の中山の備前側にある。祭神は桃太郎のモデルとしても有名な大吉備津日子(彦)命ほか。



備中側にある吉備津神社の分祀と推定されている。

J R桃太郎線(吉備線)の備前一宮駅に降り立つも雨。水溜まりを避けながら句会場の一宮公民館へと向かう。辺り一帯はもう神域の気配。受付を済ませて神社へと歩を進めるにつれ静謐の感はずます強まる。

鳥居をくぐり水鳥のいる池を見て随神門を入ると拝殿。その奥の本殿の後ろは森閑とした常緑樹の森。境内は二十余の殿社がある肅粛とした佇まいで、楓や銀杏の紅葉が雨に濡れて一段と鮮やかさを増している。ちょうど七五三の時期と重なり、着飾った子どもや家族も華を添え、句材には申し分ない吟行となった。

午後には句会。参加者二十四名からの四十八句に次々と評や感想が出され会は盛り上がる。吉備津彦神社地元の詳細な説明も加わり実り多い句会となった。会長からの「吟行だからこその俳句も多くあった」との言葉を心に残し、会を閉じた。



主な作品

- |                 |        |
|-----------------|--------|
| 末社にも金の錠前神の留守    | 藤原由美子  |
| 吉備津から吉備津彦へと初しぐれ | 秋岡 宣子  |
| 引き締まる顔の手にあり千歳飴  | 岩田 志乃  |
| 柏手を聞きたび彩づく大黄杏   | 木村ゆきこ  |
| 狛犬の牙よりしづく桃青忌    | 花房 典子  |
| 雨降りも親の願いと七五三    | 仲村 宗一  |
| しぐるるや吉備の中山烟らせて  | 薄 和子   |
| 納まりし吉備の中山冬紅葉    | 前田 宏   |
| 神木に庭師の声きく蔦紅葉    | 河原 圭子  |
| 萱ぶきの山門に散る紅葉かな   | 亀山 邦子  |
| 秋霖の吉備路またよし句の集い  | 右手 采遊  |
| 雨降りて秋深むかな絵馬の文字  | 見手倉美砂子 |
| カラフルな厄早見表初しぐれ   | 土屋 鋭喜  |
| 初冬ののすたるじいも神の技   | 國富 柿方  |
| 温羅退治のいにしへ偲ぶ炎ゆ紅葉 | 萬波 照世  |
| 備中と備前のさかい片時雨    | 國富 節子  |
| 神様はちよつといじわる紅葉雨  | 黒瀬 琢葉  |
| 拒むかに本殿の黙どすと冬    | 片岡 陽子  |
| 球体の首戻したる浮寝鴨     | 宮下 哲朗  |
| 宮の池鴨の上にも雨が降る    | 佐野 由魚  |
| 雨足の優しくなりぬ冬桜     | 岸本 順子  |
| お百度の石段高し初時雨     | 三宅 章文  |
| 神木の寒禽のこゑ吟行す     | 青井 通子  |
| しぐるるや大厄歳の守り買う   | 沼本 養甫  |

## 私の感銘句

右手 采遊 選

大夕焼限界村を焼き尽す

高村 蔦青

「大夕焼」と言えば、明日に夢を託したくなる。ところが、「限界村」が待っている。時代の流れとは言え、非情な世界である。しかも、下五の「焼き尽くす」が、有無を言わせない。重く切ない句に感銘を受けた。

無言館展眼下にひたひた夏の潮 薄 和子

先ず、「無言館」に心を惹かれた。「無言館」には、芸術作品を遺したまま、戦場に散った若い兵士たちの作品が展示してある。「夏の潮」は、兵士の描いた作品であって、深い感銘を受けられたのだろう。それは、「ひたひた」と胸に迫ってきたのだと受けとめた。

天空の点となりたり揚雲雀 久保田三千代

「揚雲雀」は、囀りながら垂直に舞い上がる。春の訪れと共に夢を託したい情景。天空の点になっても、消えてしまっても、立ち尽くす作者の姿を想像した。余韻のある句である。

## 私の感銘句

花房 典子 選

地球老ゆ無駄を重ねし夏暮れて 永禮 能孛

「地球老ゆ」と「無駄」から連想するのはロシアによるウクライナ侵攻である。家一軒建てるのにもかなりの費用が掛かるのに、素晴らしい歴史的建造物や庶民の住むアパート等を破壊するのは、大変な「無駄」である。上五の「地球老ゆ」がびたりと響く。一刻も早い収束を願いつつも、もう一年が経つ。

一般的には、一句に動詞が三つあると纏まりにくい印象があるが、作者は敢えて意図的に動詞を三つ使ったのではなからうか。言い切らない「夏暮れて」が、いつまでも続く戦争のイメージとよく合っている。

聞きとれぬままに頷くマスクかな 薄 和子

コロナ禍に入り、三年が経つ。「マスク」は冬の季語から外れるのかと思つたが、三月からマスクを外してよいとなると、また元の季語に収まるのだろうか。いずれにせよ、掲句の「マスク」は、他に季語がないので、無季か冬としての扱いになる。マスクを付けていると声がこもり、聞き取りにくいことがある。話を合わせて頷く。あるあるの共感句。

## 私の感銘句

藤野家ひろ 選

火取虫群れあるや翅汚しあひ 小西 瞬夏

夏の夜の街灯や民家の部屋には、沢山の火取虫が集まって来る。蛾だけでなく、ガガンボやナナフシ等々、お互いに必死になって灯りを目指す。互いの翅を汚しあひ、の表現に様々な昆虫達の生きる為の「凄まじさ」までもが感じられる。昆虫達の「灯り」に対する執着は、短い夏を熟知しているからだろう。

春泥やはじめはほんの遊びから 佐藤 千恵

雪解けの「春泥」、春を喜ぶ心と、どろどろの道や野や畑の様子も「はじめはほんの遊びから」とは、何かしら「ドキッ」とする表現である。現在のロシアのウクライナへの侵攻をも考えさせられる「新しい」表現である。この戦が一日も早く収束する事を祈るばかりである。

向日葵の迷路の中を呼びあへり 中野 澄子

日本では向日葵畑に、あちこち迷路が作られ、子供も大人も声を掛けあつて楽しむ。しかし、同じ地球上のウクライナでは戦が続き、被害が増大している。一日も早く、ウクライナに向日葵畑が復活する様にと祈る。

令和四年度後期 新会員

作品集

令和四年度後期の現代俳句協会への新会員として、推薦し、承認を得た。  
ここに作品を特集して紹介にかえる。

徳重

玻璃

木の芽潜めて  
所屬〔篠・麒麟俳句会〕

シンデレラの靴のぴりりと凍ててをり

大寒のカメレオンいま碧なる

撫でたればみやうと鳴きたる猫やなぎ

啓蟄や猫探しゐるそんな貌

モーツアルト小林一茶春隣

高橋つらら

所屬〔縹〕

經由地は金鳥城なり神の旅

冬月蝕仔細眺むるヌートリア

大雪や地下シエルターのカプチーノ

ゴブデイルン寒九の雨に似合ひ過ぎ

風信子ローマ男子は旅立ちぬ

第57回(令和4年度)岡山県文学選奨入賞作品

入選

向日葵

花房 典子

鳥帰るロシア人形あどけなし  
彼の国に繋がる海や二重虹  
山鳴りのごとビル破壊さる溽暑  
ひまはりや高い高いの嬰光る  
向日葵の裏側火薬にほひけり  
空爆の痕跡深しあきつ飛ぶ  
髪洗ふ空爆といふ虚しさに  
阿と畔の炎暑しづもる読経かな  
ひまはりや青と黄色の鶴折りて  
向日葵は平和の花押たかく濃く

第30回西東三鬼賞入賞作品(岡山県関係のみ)

入選

避難梯子より月光の垂れてゐる 小西 瞬夏

新会員候補者推薦のお願い

新会員候補者は、会員各位の個人推薦により選出されることとなります。  
会員のみなさまの周辺に、協会員に相応しい方がおられましたら、所定の「入会申込書」により、是非、ご推薦くださるようお願いいたします。

現代俳句協会

列島春秋 地区別現代俳句歳時記

二〇二三年掲載

- 一月 確と的吉備津の宮の弓始 稲田 マスミ
- 二月 闇に放つ宝木会陽の波猛り 岩田 志乃
- 三月 梅三分武蔵の里の人まろし 片岡 陽子
- 四月 醍醐桜千年の風のびやかに 國富 柿方
- 五月 パラグライダー風の立夏に飛びだしぬ 前田 宏
- 六月 若鮎の姿かすめし吉井川 繁森 明美
- 七月 梅雨上り日射し分け合ふ峡の邑 高村 薫青
- 八月 集落の五軒七人盆の月 難波 正夫
- 九月 天高し不舍と三鬼の露天風呂 竹内 享佑
- 一〇月 鉦の音のこちやえこちやえと秋祭 藤原由美子
- 十一月 古備前は遺品となりて秋の影 三村 榮一
- 十二月 冬日濃し吉備の御陵は鎮もれり 森田 景

## 諸家近詠

花房 典子

藤野家ひろ

牛神の絵馬の鳴りゐる大試験  
絵本展出て芽起しの雨となる  
古雛の鏡にうつるこの世かな  
島島に渡る文庫や花とべら  
秋澄めり奥の宮より人のこゑ

ワクチンの予約完了葱刻む  
春寒の更地をよぎる獣偏  
浅春を閉じこめてゐるスニーカー  
春泥やゲルニカの馬怒り啼く  
シーソーの支点の論理冬に入る

新田 啓

花房八重子

藤原美恵子

新年のシーラカンスの欠伸かな  
血温を吸い取る春の雪うさぎ  
ドーナツの包み撫でたり二月尽  
重ね着の靴下飛ばす足の湿  
蟬の穴過ぎし青年期の時間

花粉症モダンアートにかこまれて  
胸像を遠まきにして黒揚羽  
道程のその先曼殊沙華日和  
ひとりにも星は瞬く星月夜  
地球儀に海鳴りひびく星月夜

いぬふぐりに我に豊かな未解決  
父だけのにおい何処から初うぐいす  
春浅し家猫沁み入るよう媚びて  
少し寝てすうと目の開く弥生尽  
お馴染みのカーブ春風を拾って

沼本 養卮

原 鈴子

藤原由美子

節分会優しい鬼なら鬼は内  
吉備津彦と温羅は仲良し春の宮  
病窓の那岐かくされて吹流し見ゆ  
凹凸の続き春泥の一世かな  
リストバンド切れ退院外は雪

菜の花を一輪活けるうれしい日  
昼食の二人無口で漬物の味  
スマホ見てひとり笑える孫小春  
里山の時雨れる色を懐しむ  
下弦の月傾く窓に眠れない

振花や父より三世左利き  
爽涼や屋根の上にも操舵席  
まだ誰も触れぬ産毛の桃白し  
ぐづる子を父があやして七五三  
寺の子の壁の落書花八手

橋本 幹夫

藤田千鶴子

古川 麦子

春菊や恵みゆたかに雨の敵  
落日の色に染りて猫じやらし  
縦長の猫の欠伸や小六月  
大嚏してすこしだけ海動く  
生きてこそ落つる力の寒椿

寒明けや歩道橋には鳩三羽  
窓開けて朝のあいさつ笑ふ山  
鳥曇稜線ゆるりと備前富士  
薔薇芽立つアーチの下で立話  
春障子庭のざわめき雀らし

西鶴忌ひけばあやうき蝶むすび  
ガリレオにはぐれし地球雪蛭  
天国は無理初夢の縄梯子  
一陽来福目つむれば舟が出る  
丑三つの牛眠らせて雪女

## 堀 節子

新緑や釈迦三尊と一つ座に  
波音も鐘も夕ぐれ花の寺  
菊日和音が音生み木の家建つ  
どの嬰もふつくら色白桃の花  
君いづこ春夜は猫の眼がほしい

## 前田 宏

野仏の触れんばかりの赤のまま  
稲刈やエンジンしやくる日のにほひ  
山ひとつ買ふと言ひだす実山椒  
満席のお城のカフェや紅葉す  
十二月八日薬罐に水がない

## 万波 照世

水色の似合ふ少女やつくしんぼ  
この国も戦下の国も春の月  
風車をさなの脚もかぎぐるま  
秋ともし行間を読む子の手紙  
月冴ゆる兵士も死者も眠る国

## 三村 榮一

入院の友を憂えば寒月夜  
点滴の支柱を杖や便座冷ゆ  
先生の墨書古びて寒き部屋  
春立ちぬ従妹をバスに見送れば  
停車場の歩廊明るき菜の花忌

## 宮下 哲朗

マラソンの一万人に初時雨  
この星の平和を加へ初詣  
従軍の記者たりし父着膨れて  
表札の残る空部屋春浅し  
蹲に映る青空紅枝垂

## 目賀 紀子

継がぬ子が墓の掃除を気にしをり  
彼岸会や父母と似た顔集ひをり  
戸を叩く寝そびれし夜の春の雷  
身籠もりし吾子真ん中に梅見かな  
ホームにて自立へのベル桜咲く

## 森田 景

おみくじは待ち人来る初松籟  
大鷹の飛翔院展とび超えて  
おんな坂鬱という字の毛糸玉  
遺されし革の手袋やわらかく  
地域ねこ寒九の風に脚太き

## 保田 紺屋

冴返る想定外のことばかり  
呼び名とは似合わぬ棘や木瓜の花  
明日あるを疑いもせず明易し  
仙人掌を枯らす漢の独り言  
秋渴きのどに詰まりし本音かな

## 秋岡 宣子

西を向くセスナ機鳥となる臚  
うかうかと滑走路へと散る桜  
宮崎へ離陸一瞬風光る  
紅梅や万の水子がこちら向く  
そこだけに春日延命地藏尊

## 天野 光暉

人日や坊守髪を染めなほす  
綿虫の魂も真白と思ひけり  
木菟の足にはほそ紐浮世寺  
煮凝の中より抜きし箸二本  
闇汁てふ山の畠の物ばかり



## 令和五年度 総会のご案内

日時 令和五年四月三十日(日)

十一時～十五時

会場 岡山県ゆうあいセンター

(きらめきプラザ) 大会議室

岡山市北区南方二丁目十三-1

(旧国立病院跡) 駐車場有り

会費 二千元(昼食費、会場費、その他)

議事

①令和四年度事業報告・会計報告

②会計監査報告

③令和五年度事業計画案・予算案

④役員改選

⑤その他

報告・連絡事項

①新会員の紹介

②第四十一回中国地区現代俳句大会・

総会(山口県)

③その他

◇総会終了後、持ち寄り「ミニ句会」を開きます。(雑詠二句)

## 第四十一回 中国地区現代俳句大会ご案内

とき 令和五年六月十一日(日)

紙上大会(山口県)

## 第六十回 現代俳句全国大会

とき 令和五年十一月三日(金)

ところ 東天紅 上野店(東京)

## 令和五年度 行事予定

○総会

四月三十日(日)

岡山県ゆうあいセンター

○第二十八回現代俳句大会

十月二十二日(日)(予定)

岡山県ゆうあいセンター

○第二十四回吟行会

十一月初旬

衆楽園周辺(津山市)

○通信句会

毎月第二日曜日0時投句締切

## 事務局・編集部日より

▽第二十七回岡山県現代俳句大会、第二十三回の吉備津彦神社吟行等、参加者のみなさまのご協力により令和四年度の行事を無事終了することが出来ました。

▽会報五十三号をお届けします。ご多用中、原稿にご協力有難うございました。

▽今年は今のところコロナ感染が落ち着いており、長年実施出来なかつた企画も計画してゆきたいと思えます。(前田 宏)

▽令和五年度会費の振込用紙を同封しました。よろしく願います。

前年度分まで未納の方は合わせてお振り込みをお願いします。(薄 和子)

### 会報他受贈深謝

各県、各地区より会報、句集等、贈呈いただき有難くお礼申し上げます。

## 現代俳句岡山・第五十三号

令和五年三月三十一日発行

発行責任者 木村ゆきこ

発行所 岡山県現代俳句協会

編集人 前田 宏

事務局 ☎七〇〇一九七五

TEL・FAX ☎八六二四六〇七六二  
岡山市北区今八二二八三〇一 前田宏方